

青年期における自己観 [I]

—私立女子校生における発達の様相—

菊池 登紀子

The Self-concept in adolescents [I]

—Developmental phases of Self-concept with high school girls and college women in a private school—

TOKIKO KIKUCHI

目 的

人はそれぞれ、自分自身について、各々何らかのイメージや感情・評価をいだいている。これをわれわれは自己観 (Self-concept)・自己像 (Self-image) と呼び、そして各人が意識的・無意識的に抱いている自分についてのイメージを、発達の捉えたいと考え、これまでいくつかの集団を対象に、調査を試みてきた。

自己観は、年齢や性別、或いは、所属集団や集団内の地位・役割などによって、多種多様な様相を帯び、また、各個人によってもそれぞれ独自のニュアンスをもっている。こうした自己観を、出来る限り、それぞれの集団や個人の独自性を生かしながら、その内面に即した形で把握し、且つ、ある程度数量的に比較・検討を行いたいと考え、これまで、二十答法 (TST) を手法として用いてきた。今回もまた、この方法を中心としたが、さらに、これにいくつかの附加的質問や自己評価項目を加えながら、年齢的変容を横断的方法によって検討してみたい。附加的質問というのは、いずれも、二十答に書かれた記述側面が、被験者自身にとってどういう意味をもっているのか、また、二十項目に並列的に記述された諸側面が、その人の内的世界ではどう位置づけられているのか、等のことを調べたいと考え補足したものであり、今回は、方法 3)-a で述べるような点を質問法によって問い、集計整理した。

方 法

- 1) 対象；仙台市内にある中学・高校・短大を有する私立女子校の中学1年から短大2年生までの各学年生徒・学生で、調査対象者数は、合計406名であり、その内訳は、第1表の通りである。
- 2) 調査時期 1966年6月～7月
- 3) 調査手続き
 - a) 自己観の内容把握
二十答法¹⁾を使用し、解答の制限時間は15分間とした。15分間の記述後、予め見えないように折り返してあった裏面を開き、次のような質問に対し自己評定するよう求めた（用紙

1) Kuhn M. H.

第1表 調査対象者人数分布

	中 学			高 校			短 大		計
	1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	
r-s A	24	27	20	29	30	30	27	24	211
r-s B	25	32	18	27	27	25	14	27	195
計	49	59	38	56	57	55	41	51	406

については、附表参照¹⁾。附加的質問は、①二十項目に記述された諸側面の構造化をみるため、「あなたの特徴を示していると思うもの」「あなたがしばしば意識するもの²⁾」「他の人に認められた点」「あなたが大切に思っている点」について、各々1~5位まで選択するよう教示した。②各記述側面に対する満足度は、前回と同様³⁾「満足」「普通」「不満足」とし、3段階（但し前回は中学生以上は5段階）評定をさせた。今回は、これを、各記述側面のカテゴリとクロスさせて集計・整理を行った。③個々の記述側面への満足・不満足はそうであったとして、では、全体としての自分自身に関して、どう感じているのかを捉えるため、前回と同様、「全体としての自分自身に満足しているか、満足していないか」「自分が好きか、きらいか」を質問した。

b) 質問様式

前回も質問様式による反応の様相について多少言及したが、発達の資料はこれまで殆んど得られていないため、質問様式の r-s A と r-s B を用いて施行した⁴⁾。即ち、r-s A は「あなたは自分自身をどんな人だと思っていますか」であり、r-s B は「私は誰だろうか」と自分自身に問いかけてみて下さい」である。

結 果

I 記 述 数

第2表及び第2図より、学年によっていくらか変動はみられるが、短大2年生を除いてはいずれの学年でも、変動の範囲は1SD以内であり、全体の傾向としては、学年の上昇とともに記述数が増大する傾向がみられる。r-s A と r-s B とを比較すると、r-s B に於いてやや学年毎の変動が小さいが、各群内でのSDはいくらか大きく、r-s A と r-s B に著しい差は見出されない。

第2表 記 述 数

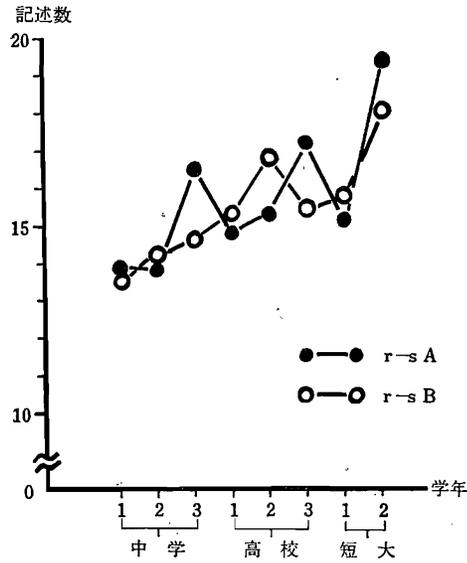
学 年	問 い 方	中 学			高 校			短 大	
		1 年	2 年	3 年	1 年	2 年	3 年	1 年	2 年
r-s A	\bar{x}	13.833	13.815	16.550	14.862	15.333	17.200	15.222	19.417
	(SD)	(3.826)	(4.046)	(3.775)	(4.897)	(4.482)	(3.781)	(3.985)	(1.552)
r-s B	\bar{x}	13.640	14.281	14.667	15.259	16.815	15.440	15.714	18.148
	(SD)	(4.807)	(4.502)	(4.922)	(4.402)	(3.682)	(3.961)	(3.554)	(2.592)

1) Kikuchi, T. 1968 a, b

2) Oyamada, T.

3) Kikuchi, T. 1968 a, b

4) Kikuchi, T. 1968 a



第1図 記述数

次に、施行中の時間経過に伴う記述数の状態に関して、中学2年・高校2年・短大2年の各学年別に、5分、10分、15分時の平均記述数を取り比較すると、第3表、第4表及び第2図のようになる。

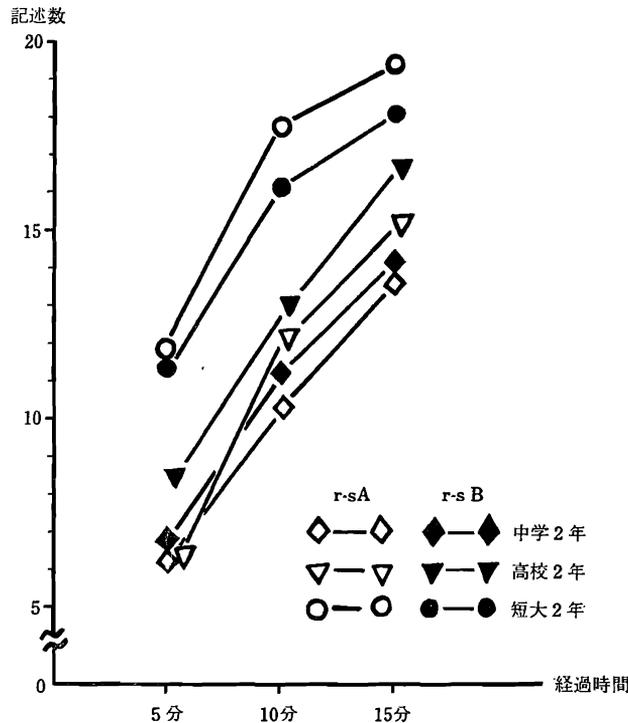
第3表 施行中の時間経過と記述数 (r-s A)

時間 \ 学年	中学 2年		高校 2年		短大 2年	
	\bar{x}	(SD)	\bar{x}	(SD)	\bar{x}	(SD)
5分	6.370	(2.958)	6.448	(2.848)	11.917	(3.240)
10分	10.333	(3.299)	12.310	(4.103)	17.750	(2.861)
15分	13.815	(4.046)	15.333	(4.482)	19.417	(1.552)

第4表 施行中の時間経過と記述数 (r-s B)

時間 \ 学年	中学 2年		高校 2年		短大 2年	
	\bar{x}	(SD)	\bar{x}	(SD)	\bar{x}	(SD)
5分	6.781	(3.028)	8.519	(3.726)	11.296	(4.153)
10分	11.344	(4.518)	13.148	(4.672)	16.222	(3.871)
15分	14.281	(4.518)	16.815	(3.682)	18.148	(2.592)

学年別に比べると、各経過時間のいずれの時点においても、r-s A、r-s Bとも、学年の上の群ほど、記述数が多い。r-s A と r-s B とを比較すると、中学2年・高校2年に於いては、どの経過時間でも、r-s B の記述数が r-s A より大きいのに対し、短大2年では、逆にどの経過時間に於いても r-s A の方が記述数が多い。



第2図 時間経過による記述数の変化

II 記述内容

自己の諸側面に関する記述内容の分類カテゴリーは、これまでの分類 (1968a 参照) とほぼ同じである。今回変更した点は、前論文の分類では、身体的側面の「その他 (B₄)」の中に、食欲に関する記述、及び、身体に関するもので他の3つの側面のカテゴリー (B₁, B₂, B₃) に含め得ない記述を分類したが、今回は、食欲に関するものは「健康・体質 (B₁)」に含め、それ以外の従来「B₄」に分類したものは全体の「その他 (Ee)」に入れた。

また、発達の側面を捉えるために、全体の「その他」の3番目に、新たに「単なる叙述 (E₃)」として、自己の身体的・心的・社会的側面の一般的傾向としては直接分類し得ないような、過去や現在の出来事・未来の予定など (例えば、「昨日手伝いをした」「今朝バスに乗ってきた」「今は夏です」「明日は体育がある」etc) に関する記述を含むカテゴリーを設けた。

カテゴリー

1. 身体的側面

- (1) 健康・体質 (B₁) …… (食欲を含む)
- (2) 容姿・体格 (B₂)
- (3) 運動能力 (B₃)

2. 心的側面

- (1) 才能・能力 (PK)
- (2) 性格・傾向・態度,
 - ①物とのかかわりあい (PCo)

- (対物的性格傾向態度)
- ②人とのかかわりあい (PCp)
(対人的性格傾向態度)
- ③自己とのかかわりあい (PCs)
(对自己的性格傾向態度)
- 3. Consensual なもの (Co)
(所属・身分・地位・氏名・生年月日・家族構成・居住地など)
- 4. その他
 - (1) 人間・自己の存在への問 (E₁)
 - (2) 施行時の自己の状態の記述 (E₂)
 - (3) 単なる叙述 (E₃)
 - (4) その他 (E_e)

II-1 質問様式 A (r-sA) の記述内容

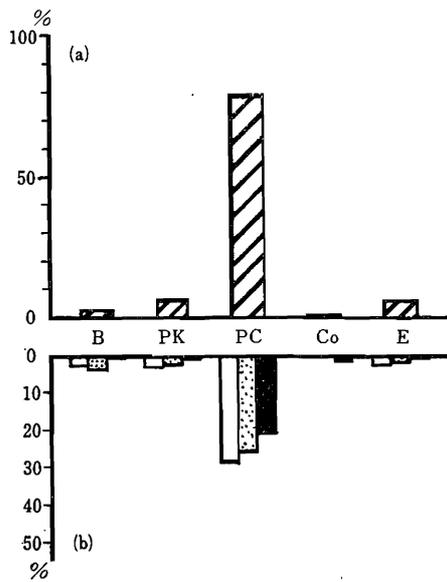
中学2年・高校2年・短大2年の各学年における記述内容を上記の категорияに分類し、百分率を求めると第5表のようになり、これらを、身体的側面 (B)、心的側面——才能・能力 (PK) 及び性格傾向態度 (PC) —、Consensual な側面 (Co)、その他 (E) の5つの category に大別すると、第6表及び第3-1(a)・4-1(a)・5-1図(a)の通りになる。

これらのどの学年に於いても、最大の比率を占めるのが「性格・傾向・態度 (PC)」に関する記述であり、特に高校2年生に於いて最大で、92.2% に及んでいる。「性格・傾向・態度」のうちでは、对自己的側面 (PCs) の比率がどの学年に於いても大きい¹⁾。

第5表 記述内容 (r-s A)

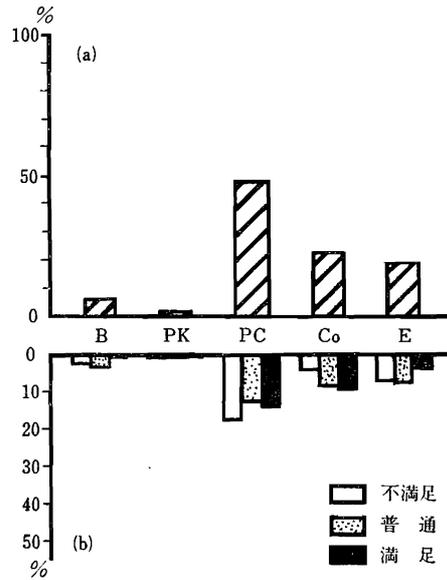
カテゴリー		学 年		中学2年 N=27	高校2年 N=30	短大2年 N=24	
				(実数) %	(実数) %	(実数) %	
Subconsensual なもの	身体的側面	健康・体質 B ₁		(5) 1.3	(0) 0	(11) 2.4	
		容姿・体格 B ₂		(11) 3.0	(8) 1.7	(19) 4.1	
		運動能力 B ₃		(3) 0.8	(2) 0.4	(4) 0.9	
	心的側面	才能能力 PK		(28) 7.5	(9) 2.0	(23) 4.9	
		性格傾向・傾向態度	対物的 PC _o		(44) 11.8	(22) 4.8	(35) 7.5
			対人的 PC _p		(50) 13.4	(78) 17.0	(61) 13.1
对自己的 PC _s			(201) 53.9	(324) 70.4	(308) 66.1		
Consensual なもの		Co		(5) 1.3	(6) 1.3	(1) 0.2	
その他	人間・自己の存在への問		E ₁	(0) 0	(0) 0	(0) 0	
	施行時の自己の状態		E ₂	(11) 3.0	(0) 0	(0) 0	
	単なる叙述		E ₃	(6) 1.6	(0) 0	(0) 0	
	その他		E _e	(9) 2.4	(11) 2.4	(4) 0.9	
計				(373) 100.0	(460) 100.0	(466) 100.0	

1) PC と Co とそれ以外 (B, PK, E) との3つの category 間で χ^2 検定をすると、どの学年に於いても 0.1% 水準で、これらの3種の category の分布状態に有意差がみられる。



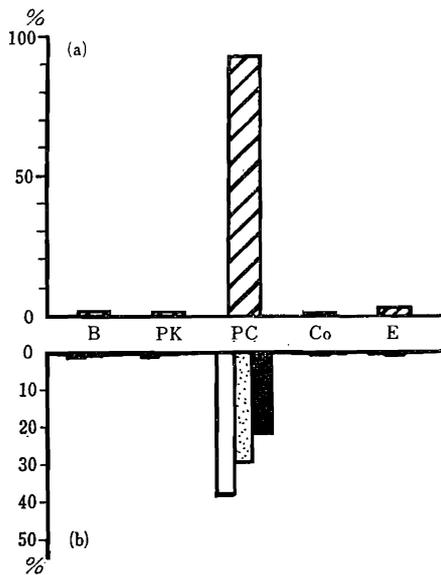
3-1 図 r-s A

(a) 記述内容の分類 (%)
 (b) 記述側面と満足度 (%)



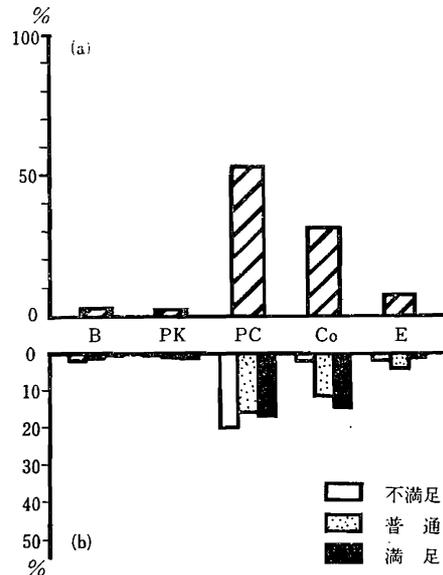
3-2 図 r-s B

(a) 記述内容の分類 (%)
 (b) 記述側面と満足度 (%)



4-1 図 r-s A

(a) 記述内容の分類 (%)
 (b) 記述側面と満足度 (%)

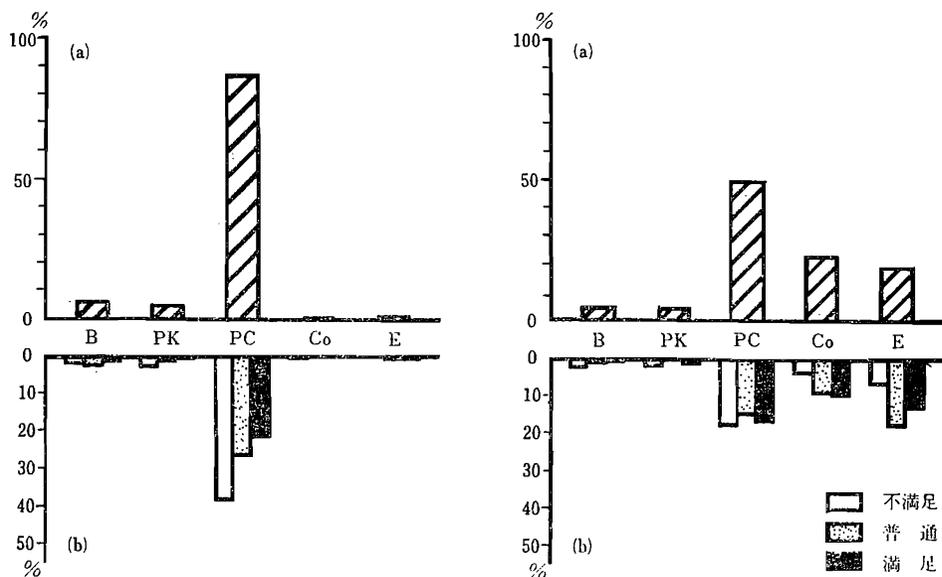


4-2 図 r-s B

(a) 記述内容の分類 (%)
 (b) 記述側面と満足度 (%)

第3図 記述内容 (中学2年)

第4図 記述内容 (高校2年)



5-1 図 r-s A (a) 記述内容の分類 (%) (b) 記述側面と満足度 (%)
 5-2 図 r-s B (a) 記述内容の分類 (%) (b) 記述側面と満足度 (%)

第5図 記述内容 (短大2年)

第6表 記述内容 (5つのカテゴリー)

カテゴリー		学 年	r-s A			r-s B		
			中 2 %	高 2 %	短大 2 %	中 2 %	高 2 %	短大 2 %
身 体 的 側 面	B		5.1	2.2	7.3	7.0	3.1	3.7
心 的 側 面	才 能 ・ 能 力	PK	7.5	2.0	4.9	1.8	2.9	3.3
	性 格 ・ 傾 向 ・ 態 度	PC	79.1	92.2	86.5	48.6	55.3	50.0
Consensual		Co	1.3	1.3	0.2	23.2	30.2	23.5
そ の 他		E	7.0	2.4	0.9	19.5	8.6	19.6
計			100.0	100.0	100.0	100.0	100.0	100.0

これを、各記述側面の満足度評定とクロスさせて集計し百分率をとると、第7表、及び、第3-1・4-1・5-1図(b)のようになる。

中学2年・高校2年・短大2年のどの学年に於いても、各記述側面に関して「満足」や「どちらともいえない」と評定するよりも「不満足」とする場合が多く、全記述数の4割前後が「不満足」、3割が「どちらともいえない」、2割5分程度が「満足」と評定されている。そして、その不満足傾向は、有意の差ではないが上の学年程比率が大きくなる。不満足な側面のうちでは、「対自己的性格傾向態度」に関する記述に対して最も「不満足」と評定されやすく、「満足」評定の2倍を占めている。一方、同じ「性格・傾向・態度」の中にあっても、「対物的自己」や「対人的自己」の諸側面に関しては、この「不満足」評定の傾向はなく、「満足」評定

第7表 記述内容と満足度 (r-s A)

	中学2年				高校2年				短大2年			
	-	0	+	無記入	-	0	+	無記入	-	0	+	無記入
B ₁	0.5	0.3	0.3	0.3	0	0	0	0	0.9	0.6	0.9	0
B ₂	0.8	2.1	0	0	1.1	0.4	0.2	0	1.5	2.2	0.4	0
B ₃	0.5	0.2	0	0	0.4	0	0	0	0.9	0	0	0
PK	3.2	3.0	1.1	0.3	1.5	0.4	0	0	3.0	1.3	0.6	0
PCo	3.5	4.0	4.3	0	0.7	1.3	2.8	0	0.4	2.4	4.7	0
PCp	3.5	3.8	5.4	0.8	5.0	6.7	5.0	0.2	4.9	3.9	4.3	0
PCs	22.0	18.0	11.8	2.2	32.8	21.7	14.4	1.5	33.1	20.2	12.9	0
Co	0	0	1.3	0	0.2	0.9	0.2	1.3	0.2	0	0	0
E ₁	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E ₂	1.6	1.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
E ₃	0.8	0.5	0.3	0	0	0	0	0	0	0	0	0
Ee	0.5	0.5	1.1	0.3	0.9	1.1	0.2	0.2	0	0.4	0.4	0
計	37.0	33.8	25.5	3.8	42.6	32.6	22.8	2.0	44.9	30.9	24.3	0

(表中の%は各学年の全記述数を100とした場合の百分率)

と同率、或いは、「満足」評定の方が多くさえる。これらの「性格・傾向・態度」に対する「満足」「不満足」「どちらでもない」という評定の分布は、中学2年生では、傾向程度 ($10 < P < 20$) であるが、高校2年及び短大2年生に於いては有意の差がある (両学年とも $p < .01$, χ^2 検定)

II-2 質問様式 B (r-s B) の記述内容及び、質問様式 A, B の比較

r-s A と同様の学年 (中学2年・高校2年・短大2年) について、記述側面を分類すると、第8表になり、r-s A と同様、5つのカテゴリーに大別すると第6表 (r-s B) 及び第3-2-4-2-5-2図(a)となる。

r-s B に於いても最大の比率を占めるのは「性格・傾向・態度」に関する記述であり、各学年とも、50%前後である。しかし、r-s A と比べると、この「性格・傾向・態度」に分類される記述は約30~40%少ない。その代り、r-s A に於いては、ほとんど出現しなかった「Consensualな側面」に関するものが20~30%見られ、また、数は多くはないが、「人間や自己の存在への問」や「施行時の自己の状態」に関する記述がr-s B に於いて生じ、これら (E₁, E₂) を含めて「その他 (E)」に属する記述が10~20%を占め、r-s A のその他より多くなっている¹⁾。また、「単なる叙述 (E₃)」は、r-s A, r-s B とともに、中学2年生に於いてのみ見出される。

第9表、及び第3-2-4-2-5-2図(b)は、各記述側面のカテゴリーと満足度評定との関連を示している。各記述側面に対する満足度評定の比率は、中学2年・高校2年・短大2年の各学年とも、「満足」「どちらともいえない」「不満足」が、それぞれ3割前後となり、同じような比

1) r-s A と同様、3種のカテゴリー (PC, Co, それ以外) に分けて行った χ^2 検定で、各学年ともそれらの分布に1%水準で有意の差がみられた。

第8表 記述内容 (r-s B)

カテゴリー		学 年		中学2年 N=32	高校2年 N=27	短大2年 N=27			
		(実数)	%	(実数)	%	(実数)	%		
Subconsensual なもの	身体的側面	健康・体質 B ₁	(4)	0.9	(1)	0.2	(4)	0.8	
		容姿・体格 B ₂	(28)	6.1	(11)	2.4	(14)	2.9	
		運動能力 B ₃	(0)	0	(2)	0.4	(0)	0	
	心的側面	才能・能力 PK	(8)	1.8	(13)	2.9	(16)	3.3	
		性格・傾向・態度	対物的 PCo	(78)	17.1	(51)	11.2	(50)	10.2
			対人的 PCp	(39)	8.5	(42)	9.3	(20)	4.1
対自己的 PCs	(105)		23.0	(158)	34.8	(175)	35.7		
Consensual なもの Co		(106)	23.2	(137)	30.2	(115)	23.5		
その他	人間・自己の存在への関 E ₁	(21)	4.6	(12)	2.6	(7)	1.4		
	施行時の自己の状態 E ₂	(7)	1.5	(1)	0.2	(7)	1.4		
	単なる叙述 E ₃	(16)	3.5	(0)	0	(0)	0		
	その他 Ee	(45)	9.9	(26)	5.7	(82)	16.7		
計		(457)	100.0	(454)	100.0	(490)	100.0		

第9表 記述内容と満足度 (r-s B)

	中学2年				高校2年				短大2年			
	-	0	+	無記入	-	0	+	無記入	-	0	+	無記入
B ₁	0.4	0	0.4	0	0	0	0.2	0	0.2	0.2	0.4	0
B ₂	2.2	3.5	0.4	0	1.5	0.7	0.2	0	2.0	0.6	0.2	0
B ₃	0	0	0	0	0.2	0.2	0	0	0	0	0	0
PK	0.9	0.7	0.2	0	0.7	0.9	1.1	0.2	2.0	0	1.2	0
PCo	4.2	3.3	8.8	0.9	2.2	3.1	5.7	0.2	0.6	2.2	7.1	0.2
PCp	2.2	2.6	3.3	0.4	2.2	2.9	4.0	0.2	1.4	0.8	1.8	0
PCs	11.2	7.2	0	2.4	15.6	10.4	7.9	0.9	15.7	11.8	8.2	0
Co	4.8	8.8	9.6	0	2.9	11.9	15.0	0.4	4.1	9.6	9.8	0
E ₁	2.0	2.2	0.4	0	0.2	1.8	0.7	0	0.8	0.2	0	0.4
E ₂	0.7	0.9	0	0	0.2	0	0	0	1.0	0	0	0.4
E ₃	1.3	1.1	0.9	0.2	0	0	0	0	0	0	0	0
Ee	3.5	3.5	2.8	0	1.8	2.9	1.1	0	4.7	8.0	3.1	1.0
計	33.3	33.7	29.1	3.9	27.5	34.6	35.9	2.0	32.7	33.5	31.8	2.0

率を示しており、r-s A と比べて、比率の分布状態が異なる¹⁾。各カテゴリーとの関連では、r-s A と比較すると、「性格・傾向・態度(PC)」全般における「不満足」傾向はなく、また、r-s B に特有に出現する consensual な側面に対しては、「満足」評定がむしろ多い。従って

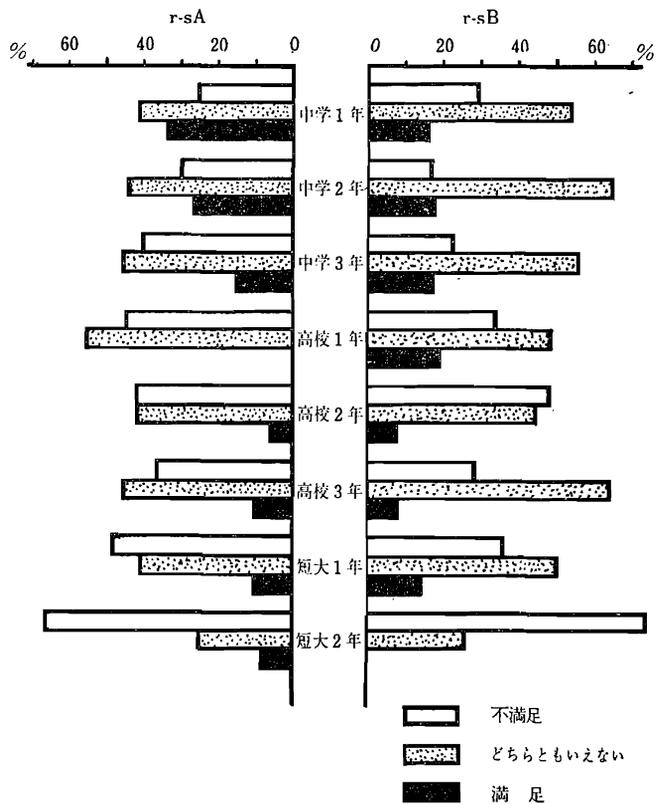
1) r-s A と r-s B との間に有意の差

第10表 全体としての自分への満足・不満足

学年	評定	r-s A			r-s B		
		-	0	+	-	0	+
中学校	1	25.0%	41.7%	33.3%	29.2%	54.2%	16.7%
	2	29.6	44.4	25.9	17.6	64.7	17.6
	3	40.0	45.2	15.0	22.2	55.6	16.7*
高校	1	44.8	55.2	0	33.3	48.1	18.5
	2	42.4	42.4	6.1	48.1	44.4	7.4
	3	36.4	45.5	9.1	28.0	64.0	8.0
短大	1	48.1	40.7	11.1	35.7	50.0	14.3
	2	66.7	25.0	8.3	74.1	25.9	0

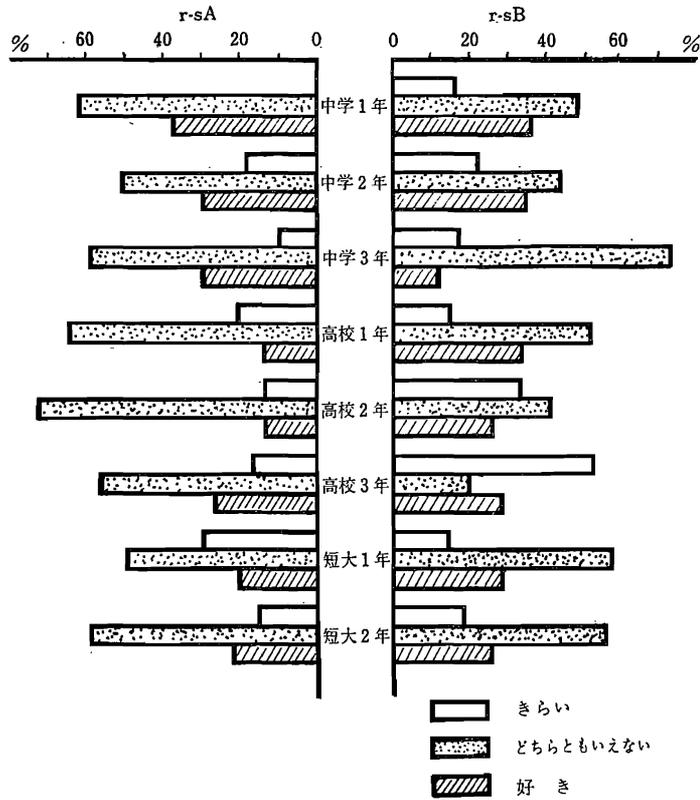
* 無記入5.6%は除外してある

不満足(-), どちらとも言えない(0), 満足(+)



第6図 全体としての自分への満足・不満足

全カテゴリーの合計の「満足」「どちらともいえない」「不満足」という評定間の分布には、r-s A では高校2年・短大2年に於いて有意の差があったが、r-s B に於いては、どの学年にも有意の差はみられない。



第7図 全体としての自分への好ききらい

II-3 全体としての自分自身への満足・不満足、及び、好き・きらいの評定

「全体としての自分自身に満足しているか、満足していないか」という問に対する解答をみると(第10表及び第6図), r-sA に於ける中学1年生の「満足」33.3%, 「不満足」25.0%という解答を除くと, すべての学年で, r-sA・r-sB とともに, 満足より不満足と評定している者の数が多い。特に, 高校1年の r-s A, 短大2年の r-sB に於いては, 自分自身に満足していると答えた者が, 皆無である。なお, r-sA・B とともに, 短大2年を除き「どちらともいえない」という評定が最も多い。

では, そういう自分が「好きか, きらいか」と問われると, 不満足ではあるが, きらいなわけではない(どちらともいえない, 好きだ)とする者が多い。高校3年の r-sB に於いては, 「きらい」と評定する者の数が比較的多いが, それでも52.0%であり, 「不満足」と評定する者の比率の最大(短大2年生は r-sB で74.1%, r-sA で66.7%が「不満足」と評定)よりはかなり低く, 他の学年では, 「きらい」という評定は更に低く10~30%程度に留まる。

(第7図参照)

III 附加的質問に対する自己評定

附加的質問, 即ち, 「あなたの特徴を示していると思うもの」, 「あなたがしばしば意識する

第12表 記述内容と「特徴を示している点」(r-s A)

	中学2年 N=27			高校2年 N=30			短大2年 N=24		
	実数	%	選択率	実数	%	選択率	実数	%	選択率
B ₁	2	1.5	(40.0)*	0	0		2	1.7	(18.2)
B ₂	3	2.2	(27.3)	1	0.7	(12.5)*	7	5.8	(36.8)
B ₃	0	0		0	0		0	0	
PK	3	2.2	(10.7)	0	0		5	4.2	(21.7)
PCo	12	8.9	(27.3)	9	6.0	(40.9)	5	4.2	(14.3)
PCp	17	12.6	(34.0)	24	16.0	(30.8)	21	17.5	(34.4)
PCs	56	41.5	(27.9)	107	71.3	(33.2)	68	56.7	(23.9)
Co	0	0		0	0		1	0.8	(100.0)*
E ₁	0	0		0	0		0	0	
E ₂	2	1.5	(18.2)	0	0		0	0	
E ₃	0	0		0	0		0	0	
Ee	2	1.5	(22.2)	2	1.3	(18.2)	0	0	
無記入	38	28.2	/	7	4.7	/	11	9.2	/
計	135	100.0	/	150	100.0	/	120	100.0	/

第13表 記述内容と「しばしば意識するもの」(r-s A)

	中学2年 N=27			高校2年 N=30			短大2年 N=24		
	実数	%	選択率	実数	%	選択率	実数	%	選択率
B ₁	2	1.5	(40.0)*	0	0		0	0	
B ₂	7	5.2	(63.6)	3	2.0	(37.5)*	6	5.0	(31.6)
B ₃	2	1.5	(66.7)*	2	1.3	(100.0)*	0	0	
PK	5	3.7	(17.9)	1	0.7	(11.1)*	7	5.8	(30.4)
PCo	3	2.2	(6.8)	5	3.3	(22.7)	0	0	
PCp	13	9.6	(26.0)	18	12.0	(23.1)	16	13.3	(26.2)
PCs	66	48.9	(32.8)	105	70.0	(32.6)	65	54.2	(22.8)
Co	0	0		1	0.7	(16.7)*	1	0.8	(100.0)*
E ₁	0	0		0	0		0	0	
E ₂	2	1.5	(18.2)	0	0		0	0	
E ₃	0	0		0	0		0	0	
Ee	2	1.5	(22.2)*	1	0.7	(9.1)	1	0.8	(25.0)*
無記入	33	24.4	/	14	9.3	/	24	20.0	/
計	135	100.0	/	150	100.0	/	120	100.0	/

もの」, 「あなたが大切に思っている点」に関する評定の結果は, 第12~17表に示される。(「他の人に認められたい点」に関しては, 他者と自己観との関連について現在調査中であり, その結果と併せて考察することにし, 今回の報告からは省いた。) これらの附加的質問に対して, 実際には1~5位の順位づけを求めたが, 今回の集計では, 先ず, この順位に関係なく5位までに選択されたものを取りあげ百分率を求めた(表中の「実数」及び「%」)。次に, 総記

第14表 記述内容と「大切に思っている点」(r-s A)

	中学2年 N=27			高校2年 N=30			短大2年 N=24		
	実数	%	選択率	実数	%	選択率	実数	%	選択率
B ₁	3	2.2	(60.0)*	0	0		2	1.7	(18.2)
B ₂	0	0		0	0		1	0.8	(5.3)
B ₃	0	0		0	0		0	0	
PK	5	3.7	(17.9)	1	0.7	(11.1)*	1	0.8	(4.3)
PCo	11	8.2	(25.0)	8	5.3	(36.4)	6	5.0	(17.1)
PCp	10	7.4	(20.0)	21	14.0	(26.9)	16	13.3	(26.2)
PCs	30	22.2	(14.9)	89	59.3	(27.6)	51	42.5	(17.9)
Co	0	0		1	0.6	(16.7)*	1	0.8	(100.0)*
F ₁	0	0		0	0		0	0	
E ₂	0	0		0	0		0	0	
E ₃	0	0		0	0		0	0	
Ee	1	0.7	(11.1)*	3	2.0	(27.3)	1	0.8	(25.0)*
無記入	75	55.6	/	27	18.0	/	41	34.2	/
計	135	100.0	/	150	100.0	/	120	100.0	/

第15表 記述内容と「特徴を示している点」(r-s B)

	中学2年 N=32			高校2年 N=27			短大2年 N=27		
	実数	%	選択率	実数	%	選択率	実数	%	選択率
B ₁	1	0.6	(25.0)*	0	0		1	0.7	(25.0)*
B ₂	9	5.6	(32.1)	5	3.7	(18.2)	5	3.7	(7.1)
B ₃	0	0		1	0.7	(50.0)*	0	0	
PK	2	1.3	(12.5)*	1	0.7	(7.7)	3	2.2	(18.8)
PCo	16	10.0	(20.5)	10	7.4	(19.6)	5	3.7	(10.0)
PCp	9	5.6	(23.1)	9	6.7	(21.4)	6	4.4	(23.1)
PCs	31	19.4	(29.5)	59	43.7	(37.3)	56	41.5	(32.0)
Co	17	10.6	(16.4)	41	30.4	(29.9)	39	28.9	(33.9)
E ₁	4	2.5	(19.0)	0	0		0	0	
E ₂	0	0		0	0		0	0	
E ₃	0	0		0	0		0	0	
Ee	6	3.8	(13.3)	4	3.0	(15.4)	9	6.7	(9.8)
無記入	65	40.6	/	5	3.7	/	11	8.2	/
計	160	100.0	/	135	100.0	/	135	100.0	/

述数が多い場合そのカテゴリーから選択される確率も大きくなるが、調査対象者にとって、記述数の絶対数は少ないが、非常に大きな意味をもっている側面もあり得るので、参考までに記述数と選択される度数との割合を「選択率（5位までに選択された数/記述数×100）」で示してみた（表中の「選択率」の欄。尚、※印を附したものは、分母が10未満である）。

r-s A に関しては、「特徴を示している点」として選択されたものは、「対自己的性格傾向態

第16表 記述内容と「しばしば意識するもの」(r-s B)

	中学2年 N=32			高校2年 N=27			短大2年 N=27		
	実数	%	選択率	実数	%	選択率	実数	%	選択率
B ₁	2	1.3	(50.0)*	0	0		0	0	
B ₂	6	3.8	(21.4)	7	5.2	(63.6)	7	5.2	(50.0)
B ₃	0	0		0	0		0	0	
PK	4	2.5	(50.0)*	2	1.5	(15.4)	10	7.4	(62.5)
PCo	13	8.1	(16.7)	4	3.0	(78.4)	1	0.7	(2.0)
PCp	8	5.0	(20.5)	11	8.2	(26.2)	5	3.7	(25.0)
PCs	39	24.4	(37.1)	51	37.8	(32.3)	43	31.9	(24.6)
Co	16	10.0	(15.1)	47	34.8	(34.3)	28	20.7	(24.3)
E ₁	5	3.1	(23.8)	2	1.5	(16.7)	1	0.7	(14.3)
E ₂	0	0		0	0		1	0.7	(14.3)
E ₃	2	1.3	(12.5)	0	0		0	0	
Ee	1	0.6	(2.2)	6	4.4	(23.1)	19	14.1	(23.2)
無記入	64	40.0	/	5	3.7	/	20	14.8	/
計	160	100.0	/	135	100.0	/	135	100.0	/

第17表 記述内容と「大切に思っている点」(r-s B)

	中学2年 N=32			高校2年 N=27			短大2年 N=27		
	実数	%	選択率	実数	%	選択率	実数	%	選択率
B ₁	0	0		1	0.7	(100.0)*	1	0.7	(25.0)*
B ₂	0	0		1	0.7	(9.1)	1	0.7	(7.1)
B ₃	0	0		0	0		0	0	
PK	0	0		3	2.2	(27.3)	2	1.5	(12.5)
PCo	16	10.0	(20.5)	13	9.6	(25.5)	7	5.2	(14.0)
PCp	4	2.5	(10.3)	13	9.6	(31.0)	4	3.0	(20.0)
PCs	4	2.5	(3.8)	26	19.3	(17.7)	28	20.7	(16.0)
Co	24	15.0	(22.6)	40	29.6	(29.2)	31	23.0	(27.0)
E ₁	3	1.9	(14.3)	2	1.5	(16.7)	2	1.5	(28.6)*
E ₂	0	0		0	0		0	0	
E ₃	2	1.3	(12.5)	0	0		0	0	
Ee	14	8.8	(31.1)	9	6.7	(34.6)	14	10.4	(17.1)
無記入	93	58.1	/	27	20.0	/	45	33.3	/
計	160	100.0	/	135	100.0	/	135	100.0	/

度」に関するものが、どの学年に於いても最も多く(中学2年41.5%, 高校2年71.3%, 短大2年56.7%), 次に多いのが、「対人的性格傾向態度」であり(12.6%, 16.0%, 17.5%), 他のカテゴリーは非常に少ない。「参考」という程度にすぎないが、一応選択率でみると、中学2年生では、身体的側面や対人的側面、対物的・対自己的側面の選択率が高い。高校2年生では、対物的・対自己的・対人的性格傾向態度が、30~40%の選択率を占めるのに対し、

短大2年生では容姿・体格に関するものと対人的性格傾向態度に選択率が高い(第12表)

では、自己の特徴を示していると思う点は、「しばしば意識されているのか」というと(第13表)5位までに選択された側面は、やはりどの学年に於いても「性格・傾向・態度」に関するものが多く(48.9%, 70.0%, 54.2%),かなり意識されているとみなされる(但し、中学2年と短大2年とに於いて、無記入が20~25%見られる)。選択率でみると、中学2年生では「特徴」で選択率の比較的高かった身体的側面に関してはやはり意識されるものが多く、対人的側面や対自己的側面も意識されているが、対物的側面に関しては、「特徴」ではあっても、意識にはしばしばのぼるわけでもないということになる。高校2年生では、「対自己的性格傾向態度」が特徴を示し且つしばしば意識されると解答されており、選択率でも同様の傾向である。短大2年生に於いては、「特徴」で選択率の高かった「容姿・体格」に関して、しばしば意識され(31.6%),対人的・対自己的性格傾向態度も選択率22~26%を占める。短大2年生に於いて、他の学年と比べて目立つのは、絶対数はそれ程多くはないが、「才能・能力」に関して記述されたものは「自己の特徴」を示し「しばしば意識される(30.4%)」と答えられていることである。

では、自己の特徴を示し、しばしば意識される側面は、自己にとって「大切なのか」というと(第14表)、中学2年と短大2年に於いて無記入が多く(各々、55.6%, 34.2%),比較は難しくなるが、「性格・傾向・態度」に関する側面はどの学年に於いても大切に思っている(22.2%, 59.3%, 42.5%)。しかし、無記入が多いせいも「特徴」や「意識」に関する質問に於ける解答に比べれば、1~5位に選ばれる比率は小さい。選択率で中学2年生に於いて、「特徴」を示し「しばしば意識される」と答えられた「身体的側面」に関するものは「大切」とは考えられていない(実数の百分比でも選択率でも0)。短大2年生における「才能・能力」も、選択率では「特徴」を示し「しばしば意識されている」が、特に大切に思っているわけではない。

次に、r-s Bに関して、同様な方法で見えていくと、「特徴を示している」と解答されるものは、どの学年でもやはり「対自己的性格傾向態度」が一番多いが、その百分率の値は、r-s Aの場合程大きくはなく、19~40%程度までに留まり、その代り、r-s Aでは殆んど見られなかった(1%以下)Consensualな側面に関して「特徴を示しているもの」とされる(10.6%, 29.9%, 28.9%)傾向がある。この傾向は、「しばしば意識されるもの」や「大切さ」に於いても見られ、「大切さ」に於いては、対自己的性格傾向態度よりもConsensualな側面の方が重視される(PCs: Coは、中学2年で2.5:15.0,高校2年で19.3:29.6,短大2年で20.7:23.0各%)。選択率では、身体的側面に関してはやはり中学2年生で「特徴」を示すものであり、「しばしば意識されるが大切なわけではない」とされ、短大2年で才能・能力に関してしばしば意識されるものが記述され、それ程大切なわけではない、とされる傾向がある。

要約と考察

以上の結果を、r-s Aとr-s Bに分けて概観し、更に考察を加えると、次のようになる。

(1) まずr-s Aについて要約すれば、学年の上の者ほど記述数が多くなる傾向がみられ、その内容は、いずれの学年(中学2年・高校2年・短大2年)に於いても、「性格・傾向・態度」に関するものが最大である。その「性格・傾向・態度」について更に分類すると、「対自己的性格傾向態度」に関する記述が大多数を占めている。そして、この側面に対しては、不満足である者が多く(「満足」の約2倍)、全体としての自分自身に対しても不満足な傾向が強い。しかし、不満足ではあるが、概して自分自身をきらいなわけではなく、また、「性格・傾

向・態度」の中でも「対物的自己」や「対人的自己」に関しては、それ程不満足と思っているわけではない。「自分の特徴」と考えているのは、「対自己的性格傾向態度」のうちの一側面である場合が多く、そをしばしば意識し、ある程度「大切だ」と思っている。

これらの傾向は、この調査対象者群に於いては、どの年令でもかなり共通しているが、さらに詳細に年令的な比較をすると、やや差異がみられる。

「性格・傾向・態度」に関する記述数は、どの学年に於いても多く見られるが、特に、高校2年生で最大であり、92.2%に及ぶ。しかも、その大半(76.4%)が、「対自己的性格傾向態度」に関するもので占められている。

それに比べ、中学2年生では、「性格・傾向・態度」に関する記述はやや少なく(79.1%)、しかも、他の学年より「対物的・対人的性格傾向態度」についての叙述の占める割合が大き(「性格・傾向・態度」のうちの31.8%)。従って、記述側面に対する満足度評定では、他の二つの学年(高校2年・短大2年)に比べ、「不満足」と「満足」との差が小さい。また、「単なる叙述」は、中学2年生にのみ若干出現する。

一方、短大2年生に於いては、「性格・傾向・態度」に関する記述は高校2年生より少ないが、それでも86.5%を占める。また、「対自己的性格傾向態度」の比率や各記述側面に対する満足度評定においても、高校2年生とほぼ同様の傾向がみられる。

以上の事実を考察すれば、上の学年程、記述数が多くなる傾向は、これまでの発達の結果と合致し、少くとも青年期に於いては、年令の上の者ほど、自己がより分化していることを暗示している。

また、内容的には、どの学年に於いても「性格・傾向・態度(その中でも、対自己的側面)」に関する記述が大半を占める。この事実は、「あなたは自分自身をどんな人だと思っているか」という問い方が、自己を外界に位置づけたり、外界との相互交渉に関して思い起こさせるよりは、自己の内面の状態や自己の傾向に関する内省をうながすような志向性をもつために生じたものと思われる¹⁾。

しかし、この同じ問い方に対しても、学年別に吟味すると、中学2年生では、他の学年で皆無かまたはあまり見られない「単なる叙述」や「対物的性格傾向態度」に関する記述が生じている。また、「全体としての自分自身」にも、より多くの者が満足している。このことは、この年令(青年期前期)にあっては、未だ「自己自身を深く反省するよりは、外界へと視野を向け、自己を外界との接点に位置づけ、自分自身に対し矛盾や葛藤を感ずる」ことが、上の学年(青年期中・後期)の者よりも、相対的に少ないことが一因であると考えられる。

高校時代になると、自己を内省する傾向が、さらにより強くなり、自己への不満足傾向も増大し、そして自己を「きらい」とする者が他の学年より増加する。つまり、自己自身と向き合い、しかも自己を受け入れにくい状態になっているものと解釈される。他方、短大2年生に於いては、やはり自己自身をふり返る傾向がみられ、そういう「自分自身」に対し「不満足」とする者が一層多く(66.7%)なるが、しかし「きらい」とする者より「好き」と評定する者の方が多くなる。それは、この時期に至って、不満足ながらもそういう自分自身を受け入れていこうとする傾向が、一般に現われるためとも考えられる。しかし、この学年で特に「不満足」傾向が急激に増大する理由については、なお不明であり、今後の検討が必要であろう。

(2) 次に、r-s B について r-s A と比較しながら要約すると、記述数に関しては、r-s A と同様の傾向がある。検査施行中の記述数の時間的経過をみると、中学2年・高校2年生に於い

1) Kikuchi, T. (1968, a)

ては、どの経過時間でも、r-s Bの方が多いのに対し、短大2年生では逆にr-s Aの方が記述数が多い。記述内容は、やはり「性格・傾向・態度」に関するものがどの学年に於いても最大であるが、その比率はr-s Aの場合より30~40%小さく、代わって、r-s Aに於いてほとんど見られない「Consensualな側面」が20~30%、「その他」が10~20%出現する。各記述側面に対する満足度は、r-s Bに於いても、「性格・傾向・態度」のうち「対物的・対人的側面」に対しては不満足傾向はなく、むしろ「満足」と評定している。また、Consensualな側面に対しても満足しており、その結果、r-s Bの場合「満足」の合計の比率がr-s Aより大きく、「満足」「不満足」「どちらともいえない」の評定が、ほぼ同じ割合になる。しかし「全体としての自分自身」に対しては「不満足」な者が多い。

これらの事実を考察すれば、r-s Bの「私は誰だろうか」という問いかけ方は、前回の結果に於いてみられたように、自己と外界とのかかわりや、自己を外界に位置づける解答が、r-s Aの場合より多く誘発されるものと考えられる。そして、それらの側面に対しては満足していることが多いので、各記述側面への満足度評定に於いて、「満足」「普通」「不満足」が、ほぼ同比率になるものとみなされる。

r-s Aでは、より低い年令に外界と自己とのかかわりあいに関する記述が比較的多く見られたのに対し、r-s Bに於いては、どの年令でも、外界への位置づけや外界との相互関係に関する記述が40%前後生じている。そのため、記述内容の比率に於いても、各記述側面に対する満足度評定でも、年令による差異があまり見られない。また、外界との接触に於いて自己を捉えた場合、各記述側面に対する不満足評定は、他の場合より減少する傾向にあるが、しかし、改めて「全体としての自分自身に満足しているか」と問われてみると、もう一度自己をふり返って評定するので、それぞれの年令層に特有の「満足・不満足」の傾向が、そのまま解答に表われ、その結果、各記述側面への満足度と関係なく、このr-s Bに於いても、高校・短大の各学年に「不満足傾向」が生じているのであろう。

以上、主な結果について要約と考察を加えたが、自己観の構造を捉えようとした附加的質問項目については、項目そのものにも、結果の処理の仕方にも未だ多くの問題があり、今後、改訂や再調査が必要である。また、記述内容やその年令的变化についても、資料を増したり、比較群を加えたりしなければならない。また、分析そのものも、具体的内容を把握できるような方法を考察・工夫していく必要がある。さらに、意識化され、記述に表われた自己観だけでなく、明瞭には意識されない「自己に対するイメージ」をも、あわせて問題にしていくことも、今後の課題であらう。

参 考 文 献

1. Combs, A. W. and Snygg, D. 1959 Individual behavior (a perceptual approach to behavior New York: Harper
2. 加藤孝義: TSTによる肢体不自由者の自己観について 臨床心理 vol. 5, No. 4. (1966)
3. 北村晴朗: 自我の心理 誠信書房 (1962).
4. Kuhn, M. H. and McPartland, T. S. 1954. An empirical investigation of self-attitudes, Amer. Sociol. Rev. vol. 19 68-76.
5. 西村春夫・星野命: 自己態度の記述の心理的負荷について, 科学警察研究所報告, 第5巻第1号 (防犯少年編) (1964)

6. Oyamada, T. 1967. Two modes of the Self-image. *Tohoku Psychologica Folia* 25, 97-103
7. 菊池登紀子：女子大学生の自己観——二十答法を用いた自己観の発達に関する研究——修紅短期大学紀要第1巻第1号 (1968a)
8. Kikuchi, T. 1968b Studies on the Development of the self-concept (I)—an investigation on the self-concept of children and adolescents by a modified method of Twenty-statements-test *Tohoku Psychologica Folia*, 27. 22~31

中大 年 組 番氏名 男女 才

最もあてはまるもの5つを選び1~5位の順番を付す

I. あなたは、自分自身をどんな人だと思っていますか。

この間に対する答を、以下の20番までの空欄に記入して下さい。
あなたのことについて、何でも結構ですから、頭に浮かんだ順
なるべく早く書いて下さい。

	満 足 の 程 度	最もあてはまるもの5つを選び1~5位の順番を付す			
		a あなたの特徴を示 していると思うもの	b あなたがしばしば 意識するもの	c 他の人に 認められたい点	d あなたが 大切に思っている点
1.	不満足 普通 満足				
2.	不満足 普通 満足				
3.	不満足 普通 満足				
4.	不満足 普通 満足				
5.	不満足 普通 満足				
6.	不満足 普通 満足				
7.	不満足 普通 満足				
8.	不満足 普通 満足				
9.	不満足 普通 満足				
10.	不満足 普通 満足				
11.	不満足 普通 満足				
12.	不満足 普通 満足				
13.	不満足 普通 満足				
14.	不満足 普通 満足				
15.	不満足 普通 満足				
16.	不満足 普通 満足				
17.	不満足 普通 満足				
18.	不満足 普通 満足				
19.	不満足 普通 満足				
20.	不満足 普通 満足				

II. では、「全体としての自分自身に、満足しているか、満足していないか、好きか、きらいか」について、以下の文章のあてはまるものに○印をつけて下さい。

私は、自分自身に { 満足している
満足していない
どちらも言えない

私は、自分自身が { 好きだ
きらいだ
どちらもいえない

中大 年 組 番 氏名 男女 才

最もあてはまるもの5つを選び1~5位の順番を付す

I. 「私^{わたくし}は誰^{だれ}だろうか」と自分自身^{じぶんじしん}に問いかけてみて下さい。

この問に対する答を、以下の20番までの空欄に記入して下さい。
あなたのことについて、何でも結構ですから、頭に浮かんだ順になるべく早く書いて下さい。

	満 足 の 程 度	a あなたの特徴を示 していると思うもの	b あなたがしばしば 意識するもの	c 他の人に 認められたい点	d あなたが 大切に思っている点
1.	不満足 普通 満足				
2.	不満足 普通 満足				
3.	不満足 普通 満足				
4.	不満足 普通 満足				
5.	不満足 普通 満足				
6.	不満足 普通 満足				
7.	不満足 普通 満足				
8.	不満足 普通 満足				
9.	不満足 普通 満足				
10.	不満足 普通 満足				
11.	不満足 普通 満足				
12.	不満足 普通 満足				
13.	不満足 普通 満足				
14.	不満足 普通 満足				
15.	不満足 普通 満足				
16.	不満足 普通 満足				
17.	不満足 普通 満足				
18.	不満足 普通 満足				
19.	不満足 普通 満足				
20.	不満足 普通 満足				

II. では、「全体としての自分自身に、満足しているか、満足していないか、好きか、きらいか」について、以下の文章のあてはまるものに○印をつけて下さい。

私は、自分自身に { 満足している
満足していない
どちらも言えない

私は、自分自身が { 好きだ
きらいだ
どちらも言えない